関野貞関係資料

はじめに　奈良文化財研究所は、明治・大正時代の建築史学者である関野貞（1868年～1935年）の関係資料を所蔵している。本資料はご子息の関野克氏より、2000年1月に寄贈を受けたものである。現在、歴史研究室が整理をおこなっており、まだ整理中ではあるが、その内実がほぼ判明したので、ここに報告する。

関野は明治元年（1868）生まれ。東京帝国大学工科大学造家学科で建築学を学び、明治28年（1895）に卒業。明治29年12月に古社寺修理工事監督・古社寺保存委員として奈良に赴任し、明治30年6月には奈良県技師に任命されている。奈良赴任中には、奈良とその周辺の古建築・古美術、さらには平城京など、文化財全般に関して精力的に調査に出向いている。明治34年2月に東京帝国大学工科大学助教授に任じられ、東京に戻る。東京帝国大学時代には、奈良赴任時代の知見を生かし、「法隆寺金堂・塔婆及中門非再建論」（明治38年）・「平城京及大内裏考」（明治40年）など、重要な論考を多く執筆している。その一方、朝鮮・中国にもしばしば足を運び、朝鮮・中国の建築・美術史に対する造詣を深めていく。昭和3年（1928）に東京帝国大学を定年退官し、昭和10年に69歳で逝去している[1]。

内　容　表6に掲げたように、奈文研所蔵の資料はおおむね、日記・調査野帳・図面類・稿本・史料類・その他に分類できる。関野の広汎な調査・研究活動の中でも、特に奈良に関係する資料が多くを占めている。

若干の解説を加えておく。日記に関しては、「世路のしほり　明治30・31年」は明治30年9月1日から明治31年12月29日にかけての関野の日記で、罫紙に書き付けた日誌を紙縒で綴じ、共紙表紙に「世路之志保里」と外題を書いている。1字目は字形からは「卅」とも読めるので、従来は「卅路之志保里」と読まれてきた。しかし明治24・25年の日記外題には「世路之栞」とあるので[2]、本日記も「世」と読むのが適当だろう。明治32年以降の日記は、市販の日記帳に書き付けたものである。関野が奈良に赴任していた明治30年から明治34年のうち、明治33年以外の日記が現在奈文研にあることになる。

調査野帳は、縦19cm・横29cm程度の画用紙を紙縒で綴じたもの。現状では紙縒が外れているものもある。また、現状とは別の綴じ穴を有する画用紙が多く、何度か綴じ直されているようである。内容は、古建築や古美術のスケッチ・その所見のメモなどである。調査の時に持ち歩いて書き付け、後に画用紙で綴じたのだろう。調査年次を示す記述はないが、奈良周辺の古社寺がほとんどであり、大部分が奈良赴任時の調書と思われる。

図面類は、浄書された図面と、調査・考察過程における書き付けに類するものとが存在する。平城京研究関係と、奈良の寺院に関わるものとがほとんどを占める。「平城京及大内裏考」挿図の原図も含まれている。

稿本は、寺社の調書を冊子にまとめたものと、論文の原稿とが存在する。前者に相当するのが、「奈良県下有名寺院沿革略」「京都府四百年以上社寺沿革略」「京都府下四百年前社寺建物調書」である。後者、論文の原稿は、罫紙に墨書して漢字片仮名混じり文で記すものが多い。抹消・語句の挿入・別紙原稿の貼り足しなどが多くあり、推敲過程をうかがうことができる。

史料類は、近世のものと明治時代のものとが存在するが、いずれも写本である。

特記事項　この中で、特に平城京研究に関連していくつか気がついた点を述べたい。まず「平城宮現況図」について（図34・巻頭図版2）。この図は縦83.2cm横55.2cm、東張り出し部を除く平城宮全域の測量図で、縮尺は2000分の1である。大字界・小字界・道路を記し、さらに土地を地目（「池溝」「草生藪雑木堤」「田」「畑」「宅地」）ごとに区分し、それぞれ色分けしている。

関野が作成した平城宮の地図で従来知られているものには、明治40年出版の「平城京及大内裏考」所載の巻末第四図がある[3]。この巻末図も「平城宮現状図」同様、縮尺は2000分の1である。しかし巻末図は田地一筆ごとの畦畔まで書き込み、宮域断面図を掲げており、より詳細な地図に仕上がっている。ただ、巻末図は平城宮北部の、現佐紀町の集落付近は一切描かれておらず、空白のままとなっている。一方「平城宮現況図」は、全体的には巻末図よりも簡略だが、佐紀町集落付近の田・畑・宅地が入り組んだ地目も含めて、宮の全域を記録する。

また巻末図と「平城宮現況図」とでは、朝堂院の復原形態も少し相違する。巻末図は平安宮同様、竜尾壇上の東西に東楼・西楼を置き、竜尾壇上の朝堂院回廊を凸字

表6　関野貞関係資料目録

資料名	員数	注
日記		
世路のしほり　明治30・31年	1冊	＊1
関野貞日記　明治32年	1冊	
関野貞日記　明治34年	1冊	
関野貞日記　明治35年	1冊	
関野貞日記　明治38年	1冊	
調査野帳		
調査野帳　法隆寺	1冊	
調査野帳　法輪寺	1冊	
調査野帳　法華寺・興福寺・春日神社・松尾寺	1冊	
調査野帳　東大寺・新薬師寺	1冊	
調査野帳　薬師寺・唐招提寺・栄山寺・当麻寺	1冊	
調査野帳　海龍王寺・極楽院・円成寺・諸社寺	1冊	
調査野帳　千寿院・南法花寺・世尊寺・金峰山寺・吉水神社・水分神社・長谷寺・聖林寺・文殊院・山辺郡	1冊	＊2
調査野帳　吉野	1冊	
調査野帳　室生寺・観心寺	1冊	
調査野帳　京都府・滋賀県	1冊	
調査野帳　香取神社	1冊	
調査野帳　周代模様	1冊	
調査野帳　絵師家系図	1冊	＊3
図面類		
平城宮現況図	1鋪	
平城宮北辺地域図	1鋪	
平城京条坊図	1鋪	
平城京距離測定図	1鋪	
大和国班田略図写	1鋪	＊4
平城京周辺条里・条坊復原図	1鋪	
条里方眼図	1鋪	
額田寺伽藍並条里図写	1鋪	＊5
寛永11年額安寺境内図写	1鋪	
近世額安寺境内図写	1鋪	
近世額安寺境内図写	1鋪	
大和国添下郡京北班田図写	1鋪	＊6
平城京右京図写	1鋪	＊7
西大寺往古敷地図写	1鋪	＊8
西大寺伽藍絵図写	1鋪	＊9
西大寺周辺小字図	1鋪	
西大寺四至図	1鋪	
薬師寺現況図	1鋪	
「平城京及大内裏考」挿図原図	計11鋪	
唐大明宮図	1鋪	
長安宮城平面図	1鋪	
稿本		
奈良県下有名寺院沿革略	1冊	
京都府四百年以上社寺沿革略	1冊	
京都府下四百年前社寺建物調書	1冊	
「平城京及大内裏考」原稿	4冊	
「平城京遺址考」原稿	1冊	＊10
「平城京遺址考」草稿断簡	1冊	＊11
「寧楽時代」原稿	1冊	＊12
尺度・法隆寺関係原稿	1冊	
寺院関係原稿	1冊	＊13
史料類		
興福寺由来記	1冊	
諸寺縁起集	1冊	
大和国内山陵図	1冊	
諸門跡系譜	1冊	
上宮聖徳法皇帝説	1冊	
招提千歳伝	5冊	
東大寺大仏殿沿革紀要	1冊	
大和志料	3冊	
その他		
続日本紀等抜粋	1冊	
史書抜書	1冊	
雑記帳	1冊	
メモ帳	2冊	
北畠治房質問状	1冊	
密教曼陀羅	1鋪	

（備考）他に断簡・論文抜刷などあり。

（注）＊1 明治30年9月1日～明治31年12月29日の日記。
＊2 金峰山寺・吉水神社・水分神社は外題には見えるが、該当の記述なし。「調査野帳　吉野」にまとめ直されたものと思われる。
＊3 他に「額安寺／博物館／興福寺」の上書きを有する表紙あり。中身は他の野帳にまとめ直されたものと思われる。
＊4 北浦定政作成絵図の写し。
＊5 現国立歴史民族博物館所蔵絵図の写し。
＊6～＊8 現東京大学文学部所蔵絵図の写し。
＊9 現西大寺所蔵元禄11年作成絵図の写し。
＊10 中欠。
＊11 他に「平城京大極殿址跡考」の表紙のみあり。
＊12 論文「日本建築史」第4章「奈良時代」の基原稿。
＊13 主に寺院関係の原稿類をファイルに綴じたもの。

形に復原する。一方「平城宮現況図」では楼を置かず、朝堂院を単純な長方形に復原している。

この2つの復原案については、「平城宮現況図」が古く、巻末図が新しいと考えられる。なぜならば、平城宮について初めて公表した論文である、明治33年の「平城宮大極殿遺址考」には、「平城宮現況図」と同様の形に復原された朝堂院の図が掲載されている[4]からである。また「平城宮現況図」は宮城の範囲を示すのみにて宮城十二門を復原していないのも、こちらの方がより古い時期に製図されたことを示すだろう。

関野が塚本松治郎（慶尚）の助力を得て平城京研究を開始したのは、明治31年11月12日のことだった。彼は翌明治32年1月21日に初めて平城宮跡を訪れ、その保存状態の良さに感動して、早速その月から2月13日にかけて平城宮跡を測量させている[5]。巻末図はこの時の測量に基づくとのことである[6]。これらの点を勘案すると、明治32年の測量後程なくして製図したのが「平城宮現況図」で、その後畦畔なども加えて製図したのが巻末図と考えられる。ともかく、整備される以前の平城宮跡を記録する地図として、貴重なものである。

次に「平城宮北辺地域図」について（図35）。この図は縦32.7cm横24.4cm。通称一条通り以北、歌姫越え（「京海道」とあり）の街道の東西を描いている。それは平城宮の北部から北側にあたる。この図は見取り図で、道路の形状など正確でない部分もあるが、旧字名や、道路・古墳、「旧土堤形及現在」などを書き込んでいる。この絵図からはまずは、旧字名として「本堂畑」「東坊」など超昇寺関係の地名を拾っていることが目につく。そし

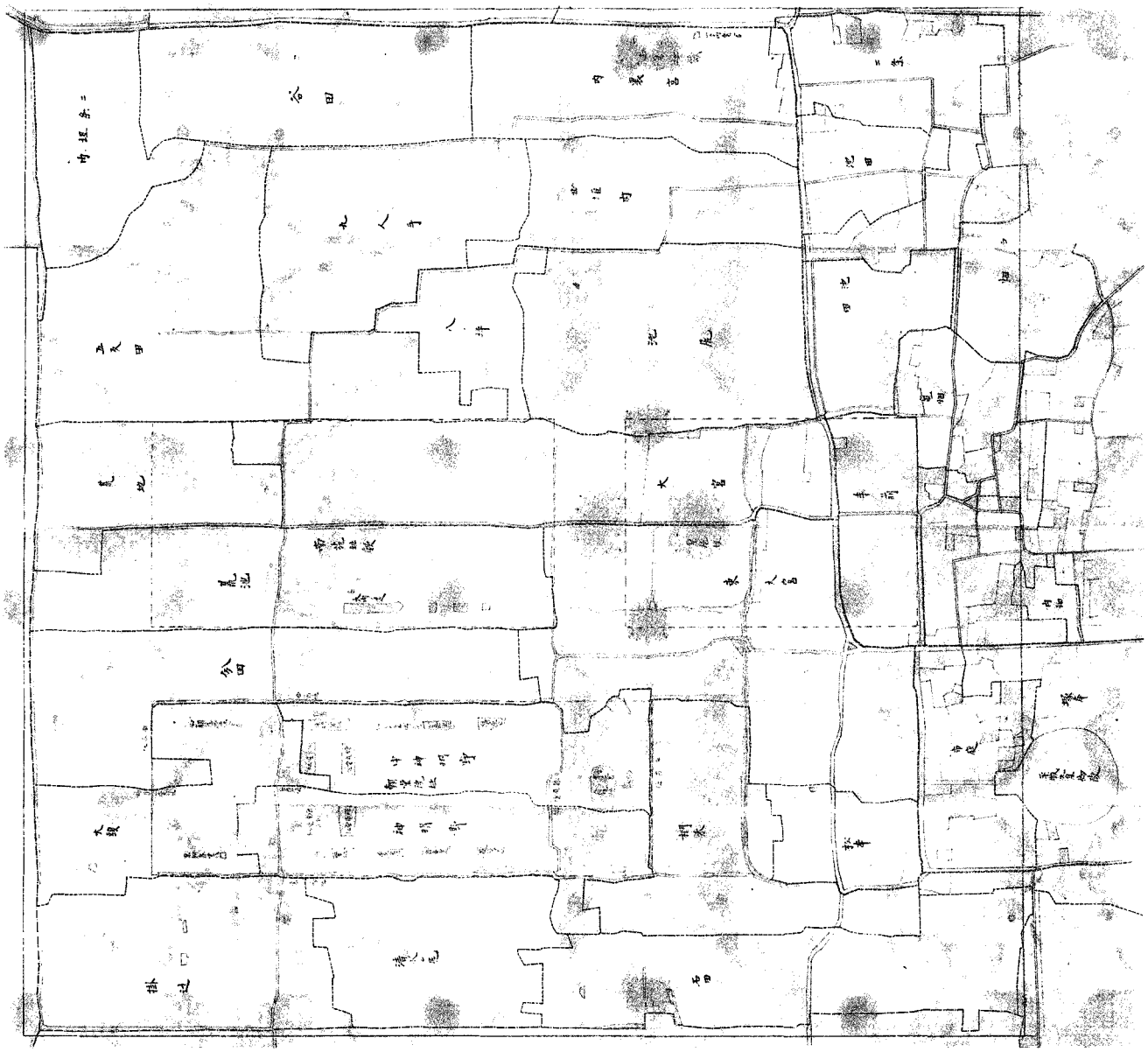

図34　平城宮現況図（右が北）

てさらに注目されるのが、現存土塁の記載である。それを見ると地図南部には、平城宮北面大垣が、平城天皇陵の東西にのびる土塁として描かれている。また地図北部にも多くの土塁がある。このうち、猫塚古墳の南側を東西に走り、「基点」とある地点で北折して、瓢箪山古墳（「壺山」とあり）と塩塚古墳の間を南北に走る土塁は、現在、松林苑の南面・西面築地と想定されている遺構である。[7] また、歌姫越え（「京海道」）の西側道路沿いに南北にのびる土塁を描いているが、これは橿原考古学研究所の松林苑第40次調査によって検出された、推定大蔵省東面築地に当たるはずである。[8]

このような記載内容に対応する記述が、「平城京及大内裏考」第1編第3章第3節「北辺」項に存在する。引用すると、まず「北一条大路より班田制にて二町北に当り、恰も小道の東西に亘りて門の外と寺畑と曰へる地の界をなし、昔時何等かの界線たりしがごとき形迹あり」とあるのは、上述した松林苑南面築地を指す。また「小道の北、寺畑及衛門戸畑と称する所は、昔時別に一廓をなせしが如き形迹あれども、何の遺址なるやを知らず」とあるのは、絵図と見較べれば、松林苑を指していることが判明する。関野は「何の遺址なるやを知らず」という評価ではあるが、松林苑とその周辺の遺構を、遺存地形から明確に認識していたのである。

関連する問題として、北辺の理解に関して指摘しておく。関野は当初は平城京に北辺の存在を認めていなかったが、その後、西大寺の北方に北辺が存在した事実より、北辺の存在を認めるに至った。しかし喜田貞吉の反論を受けて再検討した結果、条里制成立の後に平城京が建設されたとの理解に至り、「北辺説を排斥」したという。[9] 彼がこの理解に至ったのは、明治38年12月4日のことである（「関野貞日記　明治38年」）。最終案に基づく「平城京及大内裏考」は同年同月、つまりその直後に脱稿してい

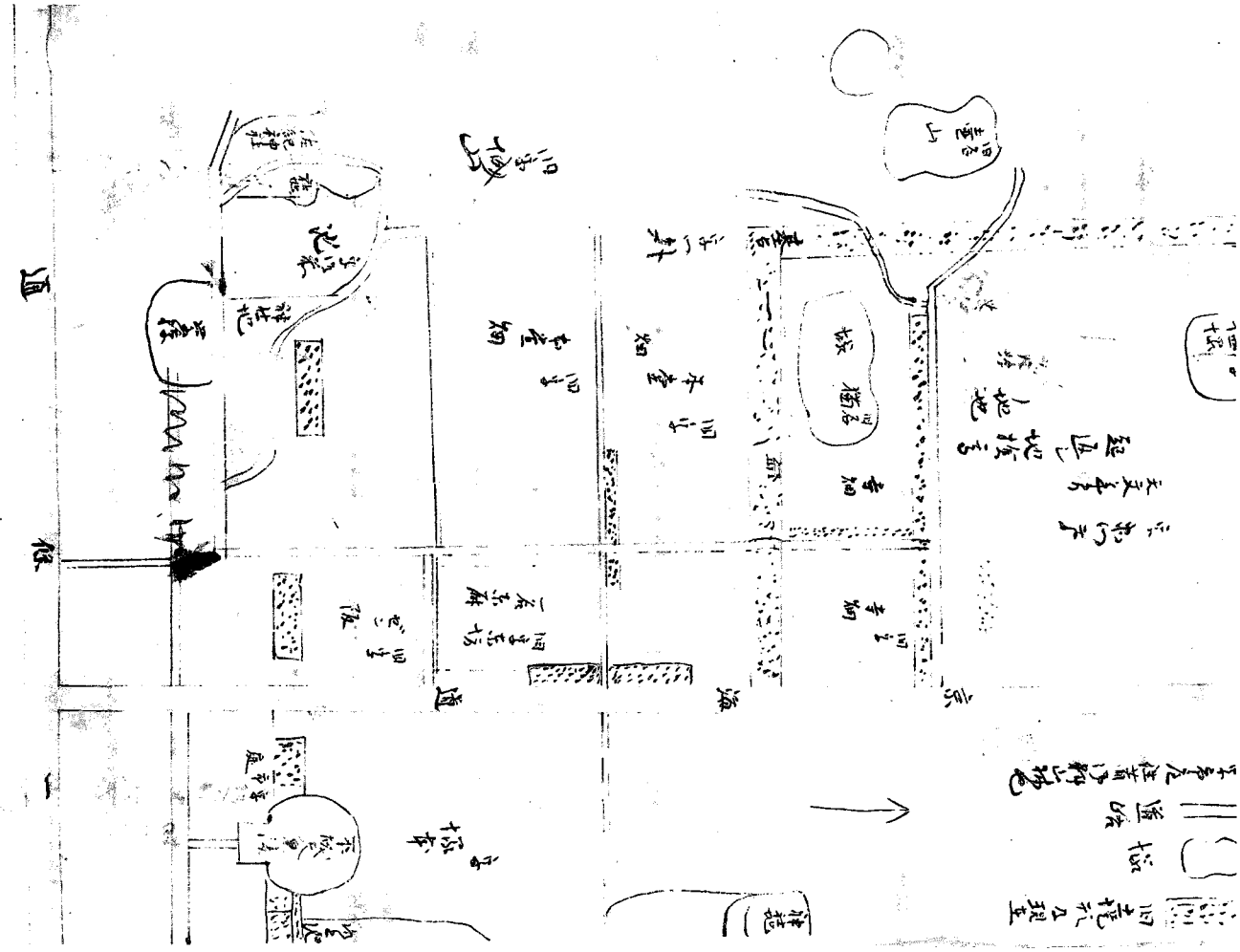

図35　平城宮北辺地域図（右が北）

る。この論文の「北辺」項は、原稿をも参照すると次のようにある。関野はまず、右京に北辺が存在したことは「明白なる事実」と指摘する。（原稿ではここで紙を継ぎ足し別紙にて）しかし一条北大路が京東条里の起点に一致するので、京城の北極は一条北大路と考えるべきで、北辺は京外にあたることを論じる。（再び紙を継ぎ足し）「此疑問を解決せんが為」、上に紹介したように宮城北辺の地形を考察し、宮城北辺に条坊制は施行されていないことを論じる。そして結局、右京の北辺は古代には京域にも京北条里にも入らない地域だったと説明している。最終段階で文章を変更していること、そのために、やや論旨に一貫性を欠くような表現になっていることが判明する。そしてこのような経緯からは、彼が北辺の考察のために、平城宮北辺地域を綿密に踏査していただろうことが窺われる。

結　語　関野は建築史学者であるが、それにとどまらず、文化財一般を理解する能力に優れていた。彼は日本近代における文化財研究の基礎を作り上げた研究者といえる。彼の資料は様々な示唆に満ちており、今回紹介できなかった資料についても、また追って理解を深めていきたい。

（吉川　聡）

1）『建築雑誌』605号（1935年）、関野克『建築の歴史学者　関野貞』（上越市総合博物館、1978年）、『考古学史研究』第7号・第8号（1997·1998年）など参照。

2）『建築の歴史学者　関野貞』（前掲）6頁に写真が掲載されている。

3）関野貞「平城京及大内裏考」（『東京帝国大学紀要』工科第3冊、1907年。のち『日本の建築と芸術』下、岩波書店、1999年に再録）。なお、『日本の建築と芸術』所収版では巻末第四図は2500分の1図として掲載している。

4）関野貞「平城宮大極殿遺址考」（明治33年1月1日付『奈良新聞』、1900年）。奈良国立文化財研究所編『平城宮跡保存の先覚者たち』（1976年）に写真が掲載されている。なお、本論文はのち「平城京及大内裏考」（前掲）に再録されるが、図面は再録されていない。

5）「世路のしほり　明治30・31年」「平城宮大極殿遺址考」（前掲）「関野貞日記　明治32年」参照。

6）「平城京及大内裏考」（前掲）緒言。

7）橿原考古学研究所編『松林苑跡』Ⅰ、1990。

8）橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報』1993年度（第1分冊、1994）。

9）「平城京及大内裏考」（前掲）緒言。